広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 孟郊の〈苦吟〉の様相 ： 「雪」の語を手がかりとして |
| Author(s) | 中木, 愛 |
| Citation | 中國中世文學研究 , 57 : 85 - 106 |
| Issue Date | 2010-03-20 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051422 |
| Right | |
| Relation | |

# 孟郊の〈苦吟〉の様相 ―「雪」の語を手がかりとして―

中木 愛

## はじめに

「苦辛して詩歌を作ること。」（『広辞苑』）をいう「苦吟」の語[1]は、孟郊や賈島の創作態度を表す言葉として定着しており[2]、その様子は、とりわけ賈島の推敲故事に象徴的に伝えられる。こういった詩作への没頭は、中唐に顕著な風潮であり、これについて論じた岡田充博「中晩唐期に見られる詩文学への没頭的風潮について―詩人達の文学的自覚の問題を中心として―」[3]は、賈島・孟郊・李賀・李商隠を中心とした〈苦吟〉（詩文学に全精神を傾け、苦行にも似た創作の日々に身心をすり減らした詩人）と、白居易を中心とした〈閑吟〉（詩作に没頭しつつも閑雅な詩境へと方向づけ、余裕と落ち着きを備えた文学精神のうちに安置させようとした詩人）の二つの傾向が見られることを指摘される。

例えば、「閑適」のジャンルを開拓した白居易の主張は、親友元稹への書簡文「与元九書」に示されており、『白氏文集』には、詩吟や詩作を「閑適」を形成する要素として組み込んだ詩が数多く見られる。

一方、孟郊や賈島はどうであろうか。彼らには詩作について論じた文章がなく、詩中の一部の「苦吟」の語については、創作の苦しみではなく現実苦の反映であることが指摘されている[4]。また、賈島の推敲故事も、後世による創作であることが明らかになっている[5]。とすれば、彼らの〈苦吟〉はどのような形で表されているのだろうか。彼らは、一字一句推敲するような、現在の意味での苦吟の姿を、詩中に描いているのだろうか。そして、「苦吟」の語に表された苦しみとはいかなる苦しみであり、どのように「詩」と結びついて認識されたのか。中唐の〈苦吟〉の実態を把握するためには、苦吟詩人とされる孟郊や賈島が、詩を作る行為をどう捉えていたのかを、彼らのテキストの内部において検証する必要があるだろう。そこで本稿では、まず孟郊の詩において、詩あるいは詩作行為がどのように描かれているかを考察し、孟郊の〈苦吟〉の様相を明らかにしたい。

## 一　孟郊の「苦吟」の語

まず、孟郊が「苦吟」の語をどのように用いているの

か確認しておきたい。「苦吟」の語が見える詩は、次の二首である。

「夜感自遣」[6]（巻三）

夜学暁不休　夜学びて　暁休まず
苦吟神鬼愁　苦吟　神鬼愁ふ
如何不自閑　如何せん　自ら閑ならず
心与身為讎　心　身と讎を為すを
死辱片時痛　死辱は片時の痛み
生辱長年羞　生辱は長年の羞
清桂無直枝　清桂　直枝無し
碧江思旧遊　碧江　旧遊を思ふ

神鬼を愁えさせるような苦しい詩吟が夜通し続く様子を、「心と体が敵対する」という強烈なイメージで捉えた前四句は、孟郊の〈苦吟〉ぶりを表す例としてしばしば取り上げられる。しかし、一句目に「学」とあるとおり[7]、応挙のための勉強を描いたもので、詩作行為そのものの描写ではない。生きながらの屈辱を恥とし、及第後に手折る桂にはまっすぐな枝がないと言って、科挙試の不公平を揶揄するのは、実体験に基づいた苦い感慨であろう。「苦吟」の背後には、受験勉強の苛酷さに加え、落第の屈辱や不公平な現実へのやるせなさが見て取れる[8]。

また、二句目の「神鬼愁」は、『毛詩』の序に「動天地感鬼神、莫近於詩。」（天地を動かし鬼神を感ぜしむるは、詩に近きは莫し。）とある伝統的な詩観に基づく。例えば「筆落驚風雨、詩成泣鬼神」（筆落つれば風雨驚き、詩成れば鬼神泣く）〔杜甫「寄李十二白二十韻」巻八〕[9]は杜甫が李白の詩について、「神鬼聞如泣、魚龍聴似禅」（神鬼聞きて泣くが如く、魚龍聴きて禅に似たり）〔白居易「江楼夜吟元九律詩成三十韻」巻一七〕は白居易が元稹の詩について述べたものであり、鬼神の反応は、他者の才能を言う表現として書かれる場合が多い[10]。孟郊の詩では、吟じる声の悲痛さが強調されているのだが、自分自身の詩に対して鬼神の反応を描くところに、自負を読み取ることもできるだろう[11]。

孟郊のもう一つの「苦吟」も、科挙落第を背景とする詩に見られる。落第した知人を見送る詩である。

「送別崔寅亮下第」（巻七）

天地唯一気　天地　唯だ一気なるも
用之自偏頗　之を用ふるに　自ら偏頗なり
憂人成苦吟　憂人は苦吟を成し
達士為高歌　達士は高歌を為す
君子識不浅　君子　識　浅からず
桂枝幽更多　桂枝　幽にして更に多し
歳晏期攀折　歳晏　攀折を期し
時帰且婆娑　時に帰りて　且く婆娑たり
素質如削玉　素質は玉を削るが如く
清詞若傾河　清詞は河を傾くるが若し

蚪龍未化時　蚪龍　未だ化せざる時
魚鱉同一波　魚鱉　一波を同じくす
去矣当自適　去け　当に自適すべし
故郷饒薜蘿　故郷　薜蘿　饒し

もともと天地の気は一体だが、用い方に偏りが生じるため、憂いを抱えた者は苦しそうに吟じ、達観した者は高らかに歌うと言う。「憂人の苦吟」は落第者の嘆きを、「達士の高歌」は俗事に乱されない達人の姿を描いたもので、[12]「吟」「歌」いずれにも、詩作はもとより、「うたう」という実質的な意味あいは希薄であろう。

「吟」字の原義は、『説文解字』に「吟、呻也。」（吟は、呻なり。）、『釈名』釈楽器に「吟、厳也。其声本出於憂愁、故其声厳粛、使人聴之悽歎也。」（吟は、厳なり。其の声は本は憂愁より出づ、故に其の声は厳粛にして、人をして之を聴きて悽（いた）み歎かしむるなり。）とあるように、呻くこと、憂いによって声を発することを言い、そこから詩歌を吟詠する意が派生した。「詩」とは関係のない悲嘆の意味で「吟」字を用いることは珍しくなく、[13]孟郊にもそういった例は散見する。

例えば次の句は、「吟」を「泣」や「哭」と並べて、様々な状況下で嘆くさまを描いている。前者は、鼠の弊害で蚕が養殖できずに織物が作れないことを、後者は陳侍御の貶謫を嘆いたものである。

・朝吟枯桑柘、暮泣空杼機（朝に吟ず　枯れし桑柘、暮に泣く　空しき杼機）「贈韓郎中愈二首」其二（巻六）
・坐哭青草上、臥吟幽水濱（坐して哭す　青草の上、臥して吟ず　幽水の濱）「江邑春霖奉贈陳侍御」（巻九）

次の句に見られる「吟」も、「詩」との関わりを持たない嘆きの描写である。前者は宮殿に舞い散る花びらに、朝廷とは縁のない自己の不遇を相対化したもの、後者は都へ帰る知人を見送って別れを惜しむ内容である。

・長安落花飛上天、南風引至三殿前。可憐春物亦朝謁、唯我孤吟渭水辺（長安の落花　天に飛び上がり、南風引き至らしむ　三殿の前。憐れむべし　春物も亦た朝謁するに、唯だ我のみ　渭水の辺に孤吟するを）「済源寒食七首」其五（巻五）
・東都清風減、君子西帰朝。独抱歳晏恨、泗吟不成謡（東都　清風減じ、君子　西のかた朝に帰る。独り歳晏の恨みを抱き、泗吟して謡を成さず）「寿西安渡奉別鄭相公二首」其二（巻八）

これらと同じように「憂人成苦吟」の「苦吟」も、沈黙していられないほどのマイナス感情の流出を言うものであろう。孟郊の「苦吟」の語は、推敲して詩句を煉る意味ではなく、及第のため、あるいは及第が叶わずに、悶え苦しむ様子を描いた表現である。

## 二　「雪」の語に映された苦しみの様相

孟郊が、自分の詩や詩作に言及したものを見ていくと、そのほとんどに苦しみの心情が垣間見え、中には「詩孟踏雪僵」（詩孟は雪を踏んで僵る）のように、雪の中で倒れる自画像を描いたものが見受けられた。「詩孟」という言い方には、詩人としての自己を規定する特別の意識が見えるため、倒れる場所として書かれた「雪」には、「詩」に関する苦しみが表象されているものと推察される。興味深いことに、孟郊には「吟雪」という先例のない表現も見受けられる。以下、「雪」の語を手がかりに、苦しみの様相を探ってみたい。

### （1）雪に倒れる詩人像

「答盧仝」（巻七）

楚屈入水死　詩孟踏雪僵
直気苟有存　死亦何所妨
日劈高査牙　清稜含氷漿
前古後古氷　与山気勢強
閃怪千石形　異状安可量
有時春鏡破　百道声飛揚
潛仙不足言　朗客無隠腸
為君傾海宇　日夕多文章
天下豈無縁　此山雪昂蔵
煩君前致詞　哀我老更狂
狂歌不及狂　歌声縁鳳凰
鳳兮何当来　消我孤直瘡
君文真鳳声　宣隘満鏗鏘
洛友零落尽　逮茲悲重傷
独自有異骨　将騎白角翔
再三勧莫行　寒気有刀槍
仰慙君子多　慎勿作芬芳

楚屈は水に入りて死し
詩孟は雪を踏んで僵る
直気　苟しくも存する有らば
死も亦た何ぞ妨ぐる所ぞ
日は劈け　高くして査牙たり
清稜は　氷漿を含む
前古　後古の氷
山と　気勢　強し
閃怪　千石の形
異状　安んぞ量るべけんや
時有りて　春鏡破れ
百道に　声　飛揚す
潛仙　言ふに足らず
朗客　隠腸無し
君が為に　海宇を傾け
日夕　文章　多し
天下　豈に縁無からんや
此の山　雪　昂蔵たり
煩はす　君が前めて詞を致し
我の老いて更に狂なるを哀れむを
狂歌するも狂に及ばず
歌声　鳳凰に縁る
鳳や何当か来たりて
我が孤直の瘡を消すべし
君が文は真に鳳声なり
宣隘　鏗鏘を満たす
洛友　零落し尽くし
茲に逮びて　悲しみ重ねて傷む
独自り　異骨有り
将に白角に騎りて翔けんとす
再三　行くこと莫かれと勧む
寒気に刀槍有ればなり
仰ぎて君子の多きに慙づ
慎しみて芬芳を作すこと勿かれ

盧仝は、孟郊の晩年の友人で、韓愈にも才能を評価されていた。生涯官途に就かず、貧しい隠居生活を営みながら『春秋』の研究に没頭していたが、[15]甘露の変に巻き込まれて殺された人物である。この詩は、一説には[16]孟郊が鄭餘慶に興元府の幕僚として招聘された際、引き留めた盧仝に答えたものとされている。孟郊はその赴任中に病死したので、その説に従えば最晩年の詩である。

ここでは、汨羅に身を投じた（「入水死」）屈原と並べて、「雪を踏んで倒れる」（「踏雪僵」）自画像が描かれる。続く三四句では、実直であるなら死すら恐れまい、と覇気を見せるが、これは杜甫が「語 人を驚かさずんば死すとも休めず」[17]と詩作に命がけになるのを詠ったのとは異なり、精神の高潔さを矜恃したものである。屈原に身の不遇を重ねる例は枚挙にいとまないが、「詩孟」のように、「詩」の後に自分の名を配して屈原と並べる独特な言い回しは、おそらく他に例を見ない。斎藤茂氏は、孟郊の詩における「詩人」の語に着目され、五例中二例が孟郊自身を指すが、いずれも「薄命と苦難とを伴う存在であるという認識が込められている点に注意したい。」「古代の「詩」の精神を受け継ぐ理想的な作品を作りうる「人」の意味で用いていると思われる。」と指摘される。[18]「詩孟」はその最たる表現であり、「詩人」という言葉では尽くしきれなかった、詩人としての強いアイデンティティーが見て取れよう。

五句目以降は、時を経て幾重にも重なった氷が奇怪な姿を呈し、春に凄まじい音を立てて割れるようすが描かれている。その後、鳳凰に比した[19]盧仝に「孤直の瘡」を慰めてほしいと求め、保身のため行かないよう忠告を受けたことを「再三勧莫行、寒気有刀槍」と描いており、孤高で実直なゆえに受けるであろう周囲からの迫害が、寒気の中の刀槍に喩えられる。「雪」は、詩人としての彼を取り巻く冷酷な環境の表象であろう。その具体的な様相は、次の「懊悩」に確認できる。

「懊悩」（巻四）

悪詩皆得官　悪詩は 皆な官を得
好詩空抱山　好詩は 空しく山を抱く
抱山冷兢兢　山を抱き 冷たくして兢兢たり
終日悲顔顔　終日 悲しみて顔顔たり
好詩更相嫉　好詩 更に相ひ嫉み
剣戟生牙関　剣戟 牙関に生ず
前賢死已久　前賢 死して已に久しきも
猶在咀嚼間　猶ほ咀嚼の間に在り
以我残杪身　我が残杪の身を以て
清峭養高閑　清峭として高閑を養はん
求閑未得閑　閑を求むるも未だ閑なるを得ず
衆誚瞋虩虩　衆誚 瞋りて虩虩たり

悪い詩ばかりが評価されて官職を得、好い詩は空しく

山中に居る。山では寒さのあまり死にそうになり、終日悲しみの面持ちが消えない。好い詩は認められないどころか嫉妬に害され、歯と歯の間に剣や戈が生えているようなもの。死して久しい先賢の遺文を吟味し、老衰の身に高らかな精神を養おうとするものの、方々から向けられる誹謗の目に戦(おのの)いてしまう。

「抱山」は、卓絶した才能ゆえ不遇を強いられるさまを喩えており、「弔盧殷十首」其一（巻一〇）にも「詩人多清峭、餓死抱空山」（詩人 多く清峭、餓死して空山を抱く）と、同様の表現が見られる。「答盧仝」の詩では、苦境の比喩として「雪」「寒気」「刀槍」の語が見られたが、「懊悩」では、好い詩が冷遇を受ける環境が「冷兢兢」という致死的な寒さ[20]に、好い詩に向けられる毒々しい嫉妬や誹謗が、「剣戟」という鋭利な武器に喩えられているのである。[21]それは「答盧仝」に描かれた苦悩の具体的な表れと言えるだろう。

酒声歓閑入雪銷　酒声は歓閑にして　入りて雪銷(と)け
雪声激切悲枯朽　雪声は激切にして　悲しくして枯朽す
悲歓不同帰去来　悲歓　同じからず　帰去来(かえりなんいざ)
万里春風動江柳　万里春風　江柳を動かす

貞元十二年、孟郊は八年越しの応挙でようやく及第を果たすが、続く吏部試には落第した。この詩は、そのうち寄寓していた卞州の陸長源のもとを離れる際、彼に贈った詩である。[23]ここでは、宴で盛り上がる豪族らを横目に、「貧士」たる自分の「空しく雪を吟じる」姿を描いている。熱気を帯びた賑やかな声が、雪を溶かすかのように響くのとは対照的に、孟郊が吟じる声は締め付けられるように切なく、その身を痩せ細らせるほどに悲しかった。[24]末二句では、豪士らが感情を共有できる相手ではないことを詠い、暖かい南方への羨望をつのらせている。実際、江南出身の孟郊に内陸部の寒さはこたえたであろうが、「雪」は、孟郊を困窮と孤立感に苛ませ、切ない声で歌わせるものとして描かれている。「吟雪」は、冷酷な現実に嘆くさまを暗に喩えた表現と言えるだろう。

次の詩は、溧陽県尉の時の作（貞元二十年）とされている。

「招文士飲」（巻四）

曹劉不免死　曹劉は死を免れず

### （2）雪を吟じる詩人像

このほか孟郊には、「吟雪」（雪を吟ず）[22]という表現が三例見られる。孟郊以前に用例がなく、単なる情景描写ではない特別な含意があるものと思われる。

「夷門雪贈主人」（巻二）

夷門貧士空吟雪　夷門の貧士　空しく雪を吟じ
夷門豪士皆飲酒　夷門の豪士　皆な酒を飲む

誰敢負年華　誰か敢へて年華に負かんや
文士莫辞酒　文士　酒を辞すること莫かれ
詩人命属花　詩人　命　花に属す
退之如放逐　退之は放逐せらるるが如く
李白自矜夸　李白は自ら矜夸す
万古忽将似　万古　忽ち将に似んとす
一朝同歎嗟　一朝　歎嗟を同じくす
何言天道正　何ぞ言はん　天道　正なりと
独使地形斜　独り地形をして斜めならしむ
南士愁多病　南士は多病を愁ひ
北人悲去家　北人は家を去るを悲しむ
梅芳已流管　梅芳は已に管に流るるも
柳色未蔵鴉　柳色は未だ鴉を蔵さず
相勧罷吟雪　相ひ勧む　雪を吟ずるを罷めんと
相従愁飲霞　相ひ従ふ　愁ひて霞を飲むに
醒時不可過　醒むる時　過ごすべからず
愁海浩無涯　愁海　浩として涯無し

五十歳でようやく得た溧陽県尉は、従九品下という地方の下級官僚であった。『新唐書』孟郊伝は、任期中に山水に遊んで職務を怠ったため、減給処分となった記事を載せるが[25]、事の真偽は擱くとして、かなり不本意なポストだったようだ。この詩は、曹植と劉楨の運命に詩人薄命を嘆き、前年の韓愈の陽山県令左遷と、李白の孤高な生き方を挙げて官途への不平を述べたあと、音楽の描写によって春が盛りではないさまを描いて[26]「雪を吟じるのをやめて酒を飲もう」と文士に勧めている。この「吟雪」が、不遇を嘆く喩えであることは、明らかであろう。溧陽は雪の少ない江南の都市であり、詩の背景には雪を実景とみなす要素も見出せない。

「和丁助教塞上吟」（巻二）

哭雪復吟雪　雪を哭し復た雪を吟ず
広文丁夫子　広文　丁夫子
江南万里寒　江南　万里寒きも
曾未及如此　曾て未だ此の如きには及ばず
整頓気候誰　気候を整頓するは誰ぞ
言従生霊始　言に生霊より始めん
無令惻隠者　惻隠たる者をして
哀哀不能已　哀哀として已む能はざらしむること無かれ

この詩では、丁氏が雪を嘆く内容の詩を作ったことを「吟雪」「哭雪」と描いている。原唱が伝わらないため詳細は分からないが、「塞上曲」は、伝統楽府「出塞」「入塞」の流れを汲んで、辺塞の荒涼とした風景や出征の苦しみを嘆くのがテーマである。末句の「惻隠」は、孟子が仁の萌芽と説いた憐れみの情をいうものであり[27]、「雪」は仁徳者を悲しませてやまないもの、つまり不合理な現実を喩えたものと推察できる。

先に、「憂人成苦吟」句の「吟」には、「詩」との関連が希薄であることを述べたが、「吟雪」は、「雪を吟じる」という表面上の意味を介して初めて「冷酷な現実を嘆く」さまを表すものであり、「歎」や「憂」ではなく「吟」字を用いたところに、「詩」に対する意識が読み取れよう。「和丁助教塞上吟」の「吟雪」は、もとより相手の詩作行為を表しており、「招文士飲」は詩人薄命を嘆くテーマの詩である。孟郊は「吟雪」という表現に、不遇をかこち現状を嘆く詩人の姿を投影させたと考えられる。

また、「雪」の語は現れないが、「苦寒吟」という楽府にも、寒さに凍えながら詩を吟じる孟郊の姿が描かれている。

「苦寒吟」（巻一）

天寒色青蒼　天寒くして 色 青蒼たり
北風叫枯桑　北風 枯桑に叫ぶ
厚氷無裂文　厚氷 裂文無く
短日有冷光　短日 冷光有り
敲石不得火　石を敲くも火を得ず
壮陰奪正陽　壮陰 正陽を奪ふ
苦調竟何言　苦調 竟に何をか言はん
凍吟成此章　凍吟して此の章を成す

この詩が基づく「苦寒行」（曹操「北上篇」）は、雪の太行山を行く行役の苦難を詠ったものだが、孟郊は寒さの描写のみに終始している。[28] 前六句の執拗なまでの寒さの描写は、まるで、凍えながらこの詩を吟じる孟郊を、効果的に登場させるための舞台装置のようにすら思われる。「詩孟踏雪僵」や「吟雪」と同様に、苛酷な環境下に居る詩人の姿を刻もうとする意識が見えるだろう。

### （3）「雪」の含意と復古志向

「雪」の語に投影された苦しみは、「雪」と題する詩に、より顕著に認められる。

「雪」（巻四）

忽然太行雪　忽然たり 太行の雪
昨夜飛入来　昨夜 飛び入り来たる
崚嶒堕庭中　崚嶒として庭中に堕ち
厳白何皚皚　厳白 何ぞ皚皚たる
奴婢暁開戸　奴婢 暁に戸を開け
四肢凍徘徊　四肢 凍りて徘徊す
咽言詞不成　咽ぶ言は 詞成らず
告訴情状摧　告訴するに 情状 摧かる
官給未入門　官給 未だ門に入らず
家人尽以灰　家人 尽く以て灰となる
意勧莫笑雪　意は勧む 雪を笑ふ莫かれと
笑雪貧為災　雪を笑へば 貧 災と為る
将暖此残疾　将に此の残疾を暖めんとし
典売争致杯　典売して争ひて杯を致す

教令再挙手　教令して再び手を挙げ
誇曜餘生才　餘生の才を誇曜せしめん
強起吐巧詞　強起して巧詞を吐き
委曲多新裁　委曲として新裁を多くせん
為爾作非夫　為爾(かくのごと)くして非夫と作り(な)
忍恥轟喝雷　恥を忍めば　喝雷　轟かん[29]
書之与君子　之を書して君子に与ふ
庶免生嫌猜　庶(こひねが)はくは嫌猜を生ずるを免れんことを

「太行」は、山西省から河北省に跨る山脈で、北方の劣悪な自然環境を象徴している[30]。忽然と襲って来た太行の雪に、体は凍てつき、声は咽んで言葉にならない。俸禄がないため家族が憔悴するさまを描き、貧困者には災いとなる雪を「笑うな」と言うのは、優雅に雪を玩ぶ者への反発であろうか。孟郊は、家財をはたいて買った酒で朽ちた体を温め、老いた才能を誇示しようと奮起する。巧みな言葉を無理に吐き出して、意に沿わない新しい詩を作り、もう一度応挙に励もうと言うのである。

「新裁」とは、科挙で出題されるような近体詩を指すものと考えられる。悲願の及第を果たした時の作「擢第後東帰書懐献座主呂侍御」（巻六）には、「宝鏡無私光、時文有新習」（宝鏡に私光無く、時文に新習有り）と、座主呂渭の公正さを称えるとともに、時流に求められる詩文が新たな作風を持つことが書かれているが、「強起」「委曲」といった語が示すとおり、それは信念に悖る作詩であった。孟郊が理想としたのは、儒教の精神を受け継いだ古の詩であり[31]、韓愈はその志向ぶりを次のように描いている。

孟生江海士、古貌又古心。嘗読古人書、謂言古猶今。作詩三百首、窅黙咸池音。騎驢到京国、欲和薫風琴
（孟生　江海の士、古貌　又た古心。嘗て古人の書を読み、謂ひて言ふ　古も猶ほ今のごとしと。詩を作る三百首、窅黙たり　咸池の音。驢に騎りて京国に到り、薫風の琴に和せんと欲す）

韓愈「孟生詩」（巻三四〇）

風貌も精神も古風で、昔を今と同じだと思いこみ、『詩経』に比すべき詩作を携えて上京する姿には、極端な志向ぶりが見て取れる[32]。このあと、二度の落第を経験し、憂いに沈む孟郊の姿が「清宵静相対、髪白聆苦吟」（清宵静かに相ひ対し、髪白くして苦吟を聆く(き)）と描かれる点も注目される。詩による復古を志すも挫折に苦悩するさまを「苦吟」の語で表すのは、科挙落第を背景とした孟郊の用い方と同じである[33]。

孟郊が理想とした復古の詩は、彼の詩中では「風雅」「大雅」「正声」「三百篇」「六義」「国風」といった『詩経』を表す語によって示されるが[34]、その具体的な様相は必ずしも明瞭ではなく、しばしば新興の詩に押されて衰

退したものとして詠われている。

・傾尽眼中力、抄詩過与人。自悲風雅老、恐被巴竹嗔。
零落雪文字、分明鏡精神。坐甘氷抱晩、永謝酒懐春
（眼中の力を傾け尽くし、詩を抄して人に過与す。自ら風雅の老いたるを悲しみ、巴竹の嗔りを被らんことを恐る。零落たり 雪のごとき文字、分明たり 鏡のごとき精神。坐ろに氷抱の晩に甘んじ、永く酒懐の春に謝す）　「自惜」（巻三）

・十歳小小児、能歌得朝天。六十孤老人、能詩独臨川
……能嘶竹枝詞、供養縄床禅。能詩不如歌、悵望三百篇（十歳 小小児、歌を能くして朝天を得。六十孤老の人、詩を能くするも独り川に臨む……能く竹枝詞を嘶けば、供養せらる 縄床の禅。詩を能くするは歌ふに如かず、悵望す 三百篇）
「教坊歌児」（巻三）

・習楽莫習声、習声多頑聾。明明胸中言、願写為高崇
（楽を習ふも声を習ふこと莫かれ、声を習ふに頑聾多し。明明たる胸中の言、願はくは写して高崇と為さん）　「秋懐十五首」其十（巻四）

・眈黙荒草行、恐懼夜魄翻。一生自組織、千首大雅言。
道路如抽蠶、宛転羈腸繁（眈黙として荒草に行き、恐懼として 夜魄 翻る。一生 自ら組織す、千首 大雅言。道路 蠶を抽くが如く、宛転として 羈腸 繁し）
「出東門」（巻三）

「自惜」では、年老いて風雅の詩風が衰えたことを嘆き、「巴竹」に睨まれることを恐れると言う。「巴竹」とは巴蜀の民謡「竹枝詞」のことで、世に持てはやされる流行歌や近体詩全般を指しており、その「嗔り」には「好詩更相嫉、剣戟生牙関」「衆誚瞋虓虓」（「懐悩」）と同じ恐怖が込められている。精神を鏡で、詩そのものを雪で形容する表現には、高潔さへの自負も見られるが、「零落」と言うように詩に対する落胆が表れている。[35]

「教坊歌児」では、わずか十歳の歌児が、竹枝詞を歌って皇帝の寵愛を受けるのに対し、老いた自分が『詩経』に比すべき詩を作っても、一向に認められないことを嘆いている。歌児の絶唱を描いた「嘶」の字には、「悪詩皆得官」（「懐悩」）と同じ皮肉が込められており、「独臨川」の姿にも「空抱山」（「懐悩」）と同じく、懐才不遇の悲嘆が映されている。また、「秋懐十五首」其十の「楽」は古の雅楽を、「声」は新興の流行歌を表すが、[36] ここは詩作について、耳を麻痺させるような流行の詩は学ぶべきではないことを述べる。「出東門」の「一生自組織、千首大雅言」には、李白の「大雅久不作、吾衰竟誰陳」（大雅久しく作らず、吾衰へば竟に誰か陳べん）[37] を継ぐような揚々たる志も見えるが、果てしない荒野を彷徨う喩えには、憔悴の色が表れている。

「雪」の詩には、懐才不遇による困窮の惨状と、そこから抜け出すためには信念を曲げて、世に受け入れられ

るような詩を作らねばならないという苦渋の思いが看取された。しかしその根底には、自分の目指すものを明確に掲げられないといった苦悶も、渦巻いていたのかもしれない。

ところで孟郊は、溧陽県尉を辞任後、韓愈の推薦を介して河南尹鄭餘慶の招聘を受け、河南水陸軍従事・試協律郎に任ぜられる。元和二年、洛陽の立徳坊に新居を構えたことを詠った「立徳新居十首」（巻五）には、住まいと職を得た落ち着いた心境が詠われるが、とりわけ鄭餘慶の光臨を喜んだ其十は、雪の描写が注目される。

仄雪踏為平、渋行変如飛。令畦生気色、嘉緑新霏微。天意資厚養、賢人肯相違（仄雪 踏みて平らかに為し、渋行 変じて飛ぶが如し。令畦に気色生じ、嘉緑 新たに霏微たり。天意 厚養を資す、賢人 肯へて相ひ違へんや）

「積もった雪を平らかに踏みならすと、難渋していた足取りが飛ぶように軽くなった」という表現には、それまで立ちはだかっていた「雪」という障害が、鄭餘慶の恩情によって取り除かれ、苦しみから解き放たれた伸びやかな喜びが表れている。

同じくこの時期の作とされる「晩雪吟」（巻三）は、瑞雪の後の皇帝の行幸を描き、堯に比すべき太平の御代への志向を詠じたものだが、冒頭に次のような描写が見られる。

貧富喜雪晴、出門意皆饒。鏡海見纎悉、氷天歩飄颻。一一仙子行、家家塵声銷（貧富 雪の晴るるを喜び、門を出でて 意 皆な饒し。鏡海 見ること纎悉にして、氷天 歩くこと飄颻たり。一一 仙子の行、家家 塵声銷ゆ）

「夷門雪贈主人」や「雪」では貧者の災いとして描かれた雪が、ここでは富貴な者とともに喜ぶ対象として詠じられているのである。「仄雪踏為平」句は「詩孟踏雪僵」（「答盧仝」）と、「貧富喜雪晴」句は「夷門貧士空吟雪、夷門豪士皆飲酒」（「夷門雪贈主人」）や「意勧莫笑雪、笑雪貧為災」（「雪」）との対照が鮮やかであり、孟郊の詩における「雪」の語の寓意性が確認できる。[38]

### （4）詩語「吟雪」と詩題「雪」のイメージ

ここで改めて、「吟雪」を詩語として、「雪」の詩を詠雪詩として見たとき、それぞれが持つイメージについて考えてみたい。まず前者について、「雪を詠う」と言えば、謝安の故事が想起されるのではないだろうか。

『世説新語』言語篇には、謝安が一族を集めて文について論じていたとき、降ってきた雪が何に似ているかと尋ねたところ、甥が空に塩を撒くさま、姪が柳絮が風に吹かれるさまに擬えたのを聞いて、大いに笑い楽しんだ

話を載せる。

謝太傅寒雪日内集、与児女講論文義。俄而雪驟、公欣然曰「白雪紛紛何所似」。兄子胡児曰、「撒塩空中差可擬。」兄女曰、「未若柳絮因風起。」公大笑楽。即公大兄無奕女、左将軍王凝之妻也。（謝太傅 寒雪の日に内集し、児女と文義を講論す。俄かに雪驟し、公 欣然として曰はく「白雪紛紛たるは何の似る所ぞ」と。兄の子胡児曰はく、「塩を空中に撒けば差や擬すべし」と。兄の女曰はく、「未だ柳絮の風に因りて起くるに若かず」と。公 大いに笑ひ楽しむ。即ち公の大兄無奕の女、左将軍王凝の妻なり。）

『世説新語』言語篇

唐詩でもこの故事は、優れた詩才、風流な宴、家族との団欒、雪の詩を作ること、柳絮の描写などに多く用いられる。表現も「謝庭飛雪」「謝庭飛柳絮」「謝家興」「謝家幽賞」「謝女題詩」「喜雪」「賞雪」など多岐に渡るが、中には「詠雪」「賦雪」といった表現も散見する。

・称觴阮林下、賦雪謝庭幽（觴を称ぐ 阮林の下、雪を賦す 謝庭の幽なるに）

盧僎「稍秋暁坐閣遇舟東下揚州即事寄上族父江陽令」（巻九九）

・謝族風流盛、于門福慶多……詠雪因饒妹、書経為愛鵝（謝族 風流盛に、于門 福慶多し……雪を詠ずるは因りて妹に饒り、経を書くは鵝を愛するが為なり）

盧綸「宴趙氏昆季書院因与会文并率爾投贈」（巻二七九）

・長愛謝家能詠雪、今朝見雪亦狂歌（長く愛す 謝家の能く雪を詠ずるを、今朝雪を見て亦た狂歌す）

徐凝「喜雪」（巻四七四）

・梁園縦玩帰応少、賦雪搜才去必頻（梁園 玩を縦にして 帰ること応に少かるべし、雪を賦して才を搜め 去くこと必ず頻りなり）

杜牧「過大梁聞河亭方宴贈孫子端」（巻五二四）

「雪」そのものは様々な角度から詠われるが、「雪を詠う」という行為が、詩題ではなく詩中に現れるとき、この故事のように優雅で風流なイメージを喚起するのではないだろうか。「貧しき者には災いとなる雪を笑うな」という憤懣（「雪」）や、雪の宴を楽しむ豪族とは対照的な貧士の嘆き（「夷門雪贈主人」）は、この伝統的なイメージとは対極にあるため、一層の深刻さを帯びるであろう。

次に、「雪を詠う」ことを詩題に記した詠雪詩の性格について考えてみたい。「雪」や「夷門雪贈主人」において、「雪」は孟郊の困窮を増長させ、不遇感や孤独感を露呈するものとして描かれていたが、韓愈「詠雪贈張籍」（巻三四三）も同じように、雪がもたらす災害に着目した描写がなされている。[39] とりわけ「巧借奢華便、専縄困約災。

威貪陵布被、光肯離金罍」（巧みに奢華の便を借し、専ら困約の災を縄る。威は貪りて布被を陵ぎ、光は肯へて金罍を離れんや）のように、富貴な者には便宜（金の酒樽が輝くきらびやかな宴）を提供し、貧困者にはひたすら災難となる（布団の中まで寒気に侵される）といった描写には、孟郊に見られたのと同様、豪奢な者への皮肉が込められている。

韓愈の詩については、三上英司「韓愈の「詠雪贈張籍」詩について」[40]が示唆に富む見解を示されている。三上氏は、雪が古来から瑞祥として詠われてきたこと、雪のイメージを瑞祥ととり花に見立てることによってその美を表現するのが、唐代一般に作られた詠雪詩の特徴であることを述べ、韓愈のこの詩はその伝統を打破する革新的な表現によって雪のマイナス面を描き出し、陽山令左遷に関与した人物を暗に諷諭したことを指摘されているのである。「雪」の伝統的なイメージを違えて自己の不遇を詠う詠み方が、韓愈と孟郊に共通することは興味深い。

## 三　詩作への諦観

最後に、孟郊が詩を作る行為を、直接「苦」と形容した詩を見ておきたい。「送淡公十二首」其十二である。淡然は、韓愈や李益とも交流のあった僧侶で、この詩は江南に帰る淡然を見送った晩年の連作である。其一では淡然の詩才を賈島と並べて称賛し、其六では、詩文を通して交流を得たことが詠まれるが、連作の最後では自分の詩観を次のように述べている。

「送淡公十二首」其十二（巻八）

詩人苦為詩　詩人 苦しみて詩を為るは
不如脱空飛　空に脱して飛ぶに如かず
一生空鷕気　一生 鷕気を空しくす
非諫復非譏　諫に非ず 復た譏に非ず
脱枯掛寒枝　脱枯 寒枝に掛かる
棄如一唾微　棄つること一唾の微なるが如し
一歩一歩乞　一歩一歩 乞ふ
半片半片衣　半片半片の衣
倚詩為活計　詩に倚りて活計を為すは
従古多無肥　古より多く肥ゆる無し
詩飢老不怨　詩飢 老いて怨まず
労師涙霏霏　師の涙の霏霏たるを労す

冒頭では、苦しみながら詩を作るより、空へ飛び出した方がよいと詠う。「鷕気」の「鷕」は雌のキジが雄を求めて鳴く声の擬声語[41]だが、ここでは、諫言でもなく誹謗でもない無益な嘆息の詩を、生涯吐き続けてきたことが描かれている。[42]五六句では、その身を、寒々とした枝にあっけなく脱ぎ捨てられた抜け殻に喩え、着るものを乞うて歩く貧窮ぶりを描く。古来より活路を見出せぬのが詩人の宿命、詩によって飢えても恨みはしないと言い、同情の涙を流してくれた淡然につのる思いを詠って、別

れの詩は結ばれる。

苦しみながらの作詩に対して、空への脱却の優位を述べた一二句は、詩をやめたいという表白だが、その「苦」とは、物乞いや飢餓に象徴される困窮の苦しみであった。[43]

これと同様の詩作への諦観は、「歎命」「偸詩」の詩にも詠われている。

「歎命」（巻三）

三十年来命　三十年来の命
唯蔵一卦中　唯だ一卦の中に蔵る
題詩怨問易　詩を題して易を問ふを怨む
問易蒙復蒙　易を問へば「蒙」復た「蒙」
本望文字達　本は文字の達せんことを望むも
今因文字窮　今は文字に因りて窮す
影孤別離月　影は孤なり　別離の月
衣破道路風　衣は破る　道路の風
帰去不自息　帰り去りて自息せず
耕耘成楚農　耕耘し　楚農と成らん

ここでは、三十年来、暗い「蒙」の卦から抜け出せない運命を嘆き、もともと栄達のよすがとするはずだった詩によって困窮に陥ったやるせなさが吐かれている。そして、孤独と貧困の中であてもなく詩人を続けるより、たとえ気が休まらなくても帰隠して農民になる方がよいと言う。

次の「偸詩」では、詩作のあり方を見つめることによって、詩をやめたいという思いが引き起こされている。

「偸詩」（巻三）

餓犬齚枯骨　餓犬　枯骨を齚み
自喫饞飢涎　自ら饞飢の涎を喫む
今文与古文　今文と古文と
各各称可憐　各各　可憐なるを称す
亦如嬰児食　亦た嬰児の食らひて
餳桃口旋旋　餳桃　口に旋旋たるが如し
唯有一点味　唯だ一点の味有るのみ
豈見逃景延　豈に逃景の延ぶるを見んや
縄床独坐翁　縄床　独坐の翁
黙覧有所伝　黙覧す　伝ふる所有るを
終当罷文字　終に当に文字を罷め
別著逍遥篇　別に逍遥篇を著すべし
従来文字浄　従来　文字の浄らかなるは
君子不以賢　君子　以て賢とせず

「飢えた犬が涎を垂らしながら枯れた骨に噛みつく。今の詩も古の詩も、それぞれの美点を称えるが、それはあたかも赤ん坊が飴をしゃぶって、口の中で転がすようなもの。一時の甘味に過ぎず、じきに消えて無くなってしまう。」という前半は、有力者の目を引くような詩作りに躍起になる現実を諷刺したものであろう。犬や赤子が

しゃぶるのは、枯れた骨とすぐに融けてなくなる飴であり、それは、内実のない詩、一時的に世間受けする詩の喩えではないだろうか。

ところで、孟郊「蚊」詩（巻九）では、夜中にブンブン飛び回り、脂ぎった人間の血を吸って生き伸びる蚊に対して、「顧己寧自愧、飲人以偸生」（己を顧みて寧ろ自ら愧づ、人を飲みて以て生を偸むを）と詠い、他人を「飲」んで生を貪ることを自省している。詩作に限定はされないが、他人の成分を吸い取って活路を求める生き方を自嘲した「偸生」の「偸」は、「偸詩」の「偸」と同義であろう。詩題の「偸詩」は、時の評価を得て官職に就くため、着想や表現を他から借りて組み立てるような詩作を表したものと考えられる。[44]

古の道に則った永遠の価値を持つような詩ではなく、名前を売り込むために組み立てる一時しのぎの詩、そんな詩作にせめぎ合うのはやめて、孟郊の心は老荘の世界へと向かう。古より伝えられた先賢の書を黙黙と眺め、古来より清廉な詩文が賢と見なされることはないのだと言って、詩文への諦観を詠うのである。

同じく「寿西安渡奉別鄭相公二首」其二（巻八）でも、国を憂え学問に勤しむことの無力さから老荘へ向かう心境を「寂静道何在、憂勤学空饒。乃知減聞見、始遂情逍遥」（寂静 道 何くにか在る、憂勤 学ぶも空しく饒かなり。乃ち知る 聞見を減ずるを、始めて遂ぐ 情の逍遥なるを）と述べ、いたずらに詩を作ってきたこと、名声には真の価値がないことを「文字徒営織、声華諒疑驕」（文字 徒らに営織す、声華 諒に驕なるかと疑ふ）と詠んでいる。「冬日」（巻三）では、生涯そういった詩作に雁字搦めになり、無益ながらも詩人としてあてどなく彷徨う姿を、「万事有何味、一生虚自囚。不知文字利、到死空遨遊」（万事 何の味か有りて、一生 虚しく自ら囚はる。文字の利を知らず、死に到るまで空しく遨遊す）と描いている。また、前に取り上げた「自惜」詩では、風雅の詩風の衰退と流行歌が重んじられる世相を嘆いた後、「始驚儒教誤、漸与仏乗親」（始めて驚く 儒教の誤れるを、漸く仏乗と親しまん）と言って、あれほど志向していた儒教の不当性を指摘し、仏教への傾倒を覗かせている。これらを鑑みると、「送淡公十二首」の「詩人苦為詩、不如脱空飛」句に見られた詩作への諦観は、正しい儒教が行われず、才能ある者を困窮させる現実社会へのそれと不可分のものであることが分かるだろう。

復古の信念を貫いた詩を作っても、認められないどころか誹謗中傷に害され、生活は貧窮への一途を辿る。活路を求め立身を図ろうとすれば、世間受けするような近体詩を作らなければならず、己の信念と摩擦する。孟郊は、時に諦観や絶望を吐き出し、時に詩人薄命を唱えて自らを慰めながら、出口のない苦悩を詠い続けたのである。

## 四　「苦」のない詩

現実社会の枠の外で「詩」に向き合うとき、孟郊の心は「苦」とは無縁で穏やかである。

「与二三友秋宵会話清上人院」（巻四）

何処山不幽　何れの処の山か幽ならざらん
此中情又別　此の中 情又た別なり
一僧敲一磬　一僧 一磬を敲き
七子吟秋月　七子 秋月を吟ず
激石泉韻清　石に激して泉韻清らかに
寄枝風嘯咽　枝に寄せて風嘯咽ぶ
冷然諸境静　冷然として諸境静かなり
頓覚浮累滅　頓かに覚ゆ 浮累滅するを
扣寂兼探真　寂を扣き兼ねて真を探る
通宵詎能較　通宵 詎ぞ能く較めんや

厳かな山中、僧侶が磬を叩き、建安の七子のごとき自分達は秋の月を吟じる。水は石にぶつかって清らかな音を響かせ、風は枝を揺らして咽ぶような音をたてる。辺り一面静寂に包まれ、煩悩がすっと消えるのを感じた。静寂の中から韻を叩き出して真理を探求すると、夜通しやめることができない。

「扣寂」は、文章を作るとき、無から有を求める精神の働きを表す表現で、陸機「文賦」（『文選』巻一七）に「課虚無以責有、叩寂寞而求音。」（虚無に課して以て有を責め、寂寞を叩いて音を求む。）とあるのを踏まえる。真理の探求をいう「探真」も、「文賦」に「探賾」という同義語が見えるが、[46] 三四句が僧侶と詩人の対であることから、仏道について言ったものかもしれない。建安の七子に自己を擬えた描写に、詩人としての自負は見えるが、同じ徹夜の詩吟でも、身心を害するまで励んだ受験勉強（「夜感自遣」詩）とは正反対の、穏やかな心象が見て取れる。

次の詩句も、寺院や山荘における超俗的な詩作を描いたものである。

・玄講島嶽尽、淵詠文字新（玄講 島嶽尽き、淵詠 文字新たなり）「与王二十一員外涯遊昭成寺」（巻五）
・隠詠不誇俗、問禅徒浄居（隠詠 俗に誇らず、禅を問ひて徒だ浄居するのみ）「題林校書花厳寺書窓」（巻五）
・嘯竹引清吹、吟花成新篇。乃知高潔情、擺落区中縁（嘯竹 清吹を引き、花を吟じて新篇を成す。乃ち知る 高潔の情、区中の縁を擺落す）「題陸鴻漸上饒新開山舎」（巻五）

「与王二十一員外涯遊昭成寺」の「淵詠」は、深い原理を表す「玄」と対になっていることから、「扣寂」や「探真」と同じく、真理を求めるような詩作を言うものであろう。「題林校書花厳寺書窓」には、世俗に誇示することのない隠者の詩作が描かれ、「題陸鴻漸上饒新開山舎」に

は、陸羽という隠者の山舎で、竹の奏でる清らかな調べと花の詩を作ることによって、俗念が払われたことが詠まれている。

数は少ないが、孟郊に、仏教的背景や隠的背景における穏やかな詩吟あるいは詩作を描いたものがあることは、留意されてよい。孟郊の〈苦吟〉を考えるとき、〈苦〉と対極の様相を確認できるからである。

## おわりに

孟郊の苦しみは、よりよい表現を求めて推敲を重ねるという、創作の過程の中で生じる苦しみではなく、自分の詩を外の社会に置くときに生じる諸々の軋轢によって、もたらされる苦しみであった。

雪の中で倒れる自画像には、孤高で実直な詩人孟郊を傷めつける冷酷な現状が映されており、「懊悩」の詩には、好い詩が冷遇されて嫉妬や誹謗の攻撃を受けるという具体像が描かれていた。雪を吟じる描写には、謝安の故事の優雅なイメージとは正反対の貧窮ぶりが鮮やかに映され、詩人薄命や懐才不遇を嘆くという含意が読み取れた。「雪」と題する詩には、苦境を脱するため、信念に悖る近体詩を作って応挙に臨もうと奮起するようすが描かれており、立身の為の詩作と己の信念との齟齬に葛藤するようすが、もう一つの苦の様相として確認できた。

孟郊は、栄達の夢を抱かせながら困窮のどん底へと追い込んだ詩、真の評価が得られず一生報われることのない詩、あるいは、世間の評価を得ようと貪婪にせめぎ合うような、内実のない一時しのぎの詩に対して、時に諦観を吐き、そこからの脱却を求めた。現実を離れた超俗的な背景において詩を吟じるとき、苦しみは沈静化していたが、士大夫として生きる以上、永遠にその世界に浸ることはできなかっただろう。世間に迎合できず、詩人薄命の運命を甘受することもできず、己の志向する詩を意気揚々と掲げることもできないまま、孟郊は出口のない苦悩を詠い続けたのである。苦しみの中で、その苦しみをじっと凝視して表現することに、詩人としてのアイデンティティーを見出していたようにも思われる

孟郊の〈苦吟〉をこの意味で理解するならば、及第をめぐる苦悩を描いた「苦吟」の語も、その様相を端的に表した一つの例として捉えることができるのである。今後は、賈島の〈苦吟〉の様相についても考察を加えた上で、彼らが苦吟詩人と位置付けられるに到った経緯と背景を探ってみたい。

## 注

(1)『大漢和辞典』には「骨折って詩歌を考え作る。又、其の作。」、『漢語大詞典』には「反覆、苦心推敲。言做詩極爲認真。」とある。

(2) 例えば、前野直彬『中国文学史』(東京大学出版社、一九八九)には、「孟郊・賈島の二人は、詩句の雕琢に全身全霊を打ち込み、苦吟のすえに独特のスタイルを生み出した詩人

である。（第四章 隋・唐、中唐の詩）とあり、『漢詩の事典』（松浦友久編、大修館書店、一九九九）の「苦吟」の項（Ⅳ 漢詩を読むポイント、用語、5詩学用語）には、「作詩に苦労すること。「苦吟を話題にする場合、韓愈の門下に集ったいわゆる韓門詩人を取り上げないわけにはゆかない。とりわけ、「郊寒島瘦」と表された孟郊と賈島、あるいは鬼才をうたわれた李賀が、苦吟派の代表格と言えるであろう。」とある。

（3）『名古屋大学文学部研究論集』七六号、一九八〇。

（4）岡田充博「中晩唐期〈苦吟〉覚え書き―「苦吟」という言葉の意味内容・使用状況の検討を中心として」（『名古屋大学中国語学文学論集』第二輯、一九七七）、坂野学「「苦吟」について」（『集刊東洋学』五四号、一九八五）、岡田充博「〈苦吟〉再考」（横浜国大『国語研究』第六号、一九八八）など。「苦吟」の用例の個別の解釈には揺れがあるが、いずれも創作の労苦や耽溺を表す「苦吟」の用法が晩唐以降に定着することを指摘される。

（5）静永健「賈島「推敲」考」（『中国文学論集』第二九号、二〇〇〇）に詳しい。

（6）『唐文粋』巻一五では「失志夜坐思帰楚江」に作り、「苦学吟」に作るものもある。孟郊の詩は、『孟郊詩集校注』（華忱之・喩学才校注、人民文学出版社、一九九五）を底本とし（詩題の後に巻数を付記）、異同は論旨に関わる部分のみ適宜注記した。なお、詩の制作年や事跡は、同書の附録『孟郊年譜』および斎藤茂著『孟郊研究』（汲古書院、二〇〇八）の「孟郊略年譜」等を参照した。

（7）後世の詩話には、一句目の「学」を「吟」字に作るものが散見する。例えば、宋・魏泰『臨漢隠居詩話』は、孟郊の「苦吟」の例として「夜吟暁不休、苦吟神鬼愁」句を挙げ、宋・魏慶之『詩人玉屑』、宋・元閲『詩話総亀』等はこれをそのまま引用している。「吟」字に作る場合、一二句は落第の屈辱を詠じ続けた描写とも解せようが、「苦吟」の語が詩句を煉る苦しみを言うものでない点は変わらない。

（8）坂野学氏（前掲注4）はこの詩について「詩人が詩作へ向うのは、決して好詩や佳句を得るためではない。……下第した屈辱感が、詩作でもしなければ辛くてやり切れない情態に追いやっているのである。」と述べられる。

（9）杜甫の詩は『杜詩詳注』（中華書局、一九七九）、白居易の詩は『白居易詩集校注』（謝思煒校注、中華書局、二〇〇六）、その他の唐詩は『全唐詩』（中華書局点校本）に拠った（詩題の後に巻数を付記）。

（10）朱逵「懐素上人草書歌」（巻二〇四）の「妙絶当動鬼神泣、崔蔡幽魂更心死」（妙絶なること当に鬼神を動かして泣かしむべし、崔蔡の幽魂 更に心死す）、杜甫「敬贈鄭諫議十韻」（巻二）の「思飄雲物外、律中鬼神驚」（思ひは雲物の外に飄（ひるがへ）り、律中（あた）りて鬼神驚く）など枚挙にいとまない。なお、白居易「一字至七字詩」（外集）には、詩の特性を詠んだものとして「調清金石怨、吟苦鬼神悲」（調清らかにして金石怨み、吟苦しくして鬼神悲しむ）の句が見られる。

（11）孟郊「秋懐十五首」其十（巻四）にも「麤縷不自整、古

吟将誰通。幽竹嘯鬼神、楚鉄生虬龍」（廬縷 自らは整へず、古吟 誰とか通ぜん。幽竹に鬼神嘯き、楚鉄に虬龍生ず）とあり、自作に対する鬼神の反応が記される。

(12) 孟郊「達士」（巻三）には、憂いすら高らかに歌い上げる達人の姿が、「達人識元化、変愁為高歌」（達士は元化を識り、愁いを変じて高歌を為す）と描かれている。「達士」の語は、早くは『呂氏春秋』巻二十「恃君覧」に、「達士者、達乎死生之分。」（達士は、死生の分に達す。）、『後漢書』仲長統伝に「至人能変、達士抜俗。」（至人は能く変じ、達士は俗を抜く。）とある。

(13) 例えば、張衡「思玄賦」（『文選』巻一五）の「素女撫絃而余韻兮、太容吟曰念哉」（素女 絃を撫して余韻あり、太容吟じて曰はく「念へ」）や向秀「思旧賦」（『文選』巻一六）の「昔李斯之受罪兮、歎黄犬而長吟」（昔 李斯の罪を受くるや、黄犬を歎きて長吟す）の「吟」には、「歎也。」とする張銑注が施されている。

(14) 底本は「陽」字に作るが、諸本によって改めた。

(15) 韓愈「寄盧仝」（巻三四〇）に「玉川先生洛城裏、破屋数間而已矣」（玉川先生 洛城の裏、破屋数間のみ）、「先生結髪憎俗徒、閉門不出動一紀」（先生 結髪より俗徒を憎み、門を閉ぢて出でざること動もすれば一紀なり）、「先生事業不可量、惟用法律自縄己。春秋三伝束高閣、独抱遺経究終始」（先生の事業は量るべからず、惟だ法律を用て自ら己を縄すのみ。春秋の三伝 高閣に束ね、独り遺経を抱きて終始を究む）とある。

(16)『孟郊賈島詩選』（劉斯翰選注、三聯書店香港分店、一九八六）。

(17) 杜甫「江上値水如海勢聊短述」（巻一〇）。

(18)『孟郊研究』（前掲注6）、第三章第三節 詩人の運命――「盧殷を弔う十首」。

(19)『論語』微子篇の狂接輿の故事を踏まえる。

(20)「殣」字は、底本では異体字の「殣」に作る。『広韻』下平声十六「蒸」韻に「殣、欲死状。」（殣は、死せんと欲するの状なり。）とある。

(21) 山之内正彦「孟郊詩論（上）――連作詩を中心に――」（『東洋文化研究所紀要』第六十八冊、一九七六）は、これについて「詩に巧みなことを必須とした唐代の科挙に対する痛烈なあてこすり」と述べられる。また、孟郊の詩に「瘡」「傷」「刃物」を表す語が多用され、「精神的苦痛を肉体的被害として受け取る孟郊独自の感性」が見えることを指摘されている。

(22) 孟郊の「吟雪」は、「飲酒」「飲霞」「哭雪」と対を成しており、「招文士飲」詩では明らかに「雪」が実景ではないことから、「雪に吟ず」ではなく「雪を吟ず」と判断した。雪の中での詩吟は、例えば「喜歓得伴山僧宿、看雪吟詩直到明」（山僧を伴ひて宿るを得るを喜歓す、雪を看て詩を吟じ直に明に到る）〔王建「宿長安県後斎」、巻三〇一〕、「長嘯毎来松下坐、新詩堪向雪中吟」（長嘯 毎に松下に来たりて坐し、新詩 雪中に向かひて吟ずるに堪ふ）〔張籍「送楊州判官」、巻三八五〕のように、より具体的な描写になると考えられる。

(23) 陸長源「答東野夷門雪」（巻二七五）の序文に「郊客于汴、

将帰賦夷門雪贈別、長源答此。」（郊 汴に客たり、将に帰らんとして「夷門雪」を賦して贈別す、長源 此に答ふ。）とある。

(24) 三四句「酒声歓閑入雪銷、雪声激切悲枯朽」の「酒声」「雪声」は、「酒（を楽しむ豪族の）声」「雪（を詠じる孟郊の）声」の意である。

(25)『新唐書』孟郊伝に「年五十得進士第、調溧陽尉。県有投金瀨平陵城、林薄蒙翳、下有積水。郊閑往坐水旁、裴回賦詩、而曹務多廃。令白府、以假尉代之、分其半俸。」（年五十にして進士の第を得、溧陽尉に調せらる。県に投金瀨・平陵城有り、林薄 蒙翳にして、下に積水有り。郊 閑に往きて水旁に坐し、裴回して詩を賦し、曹務多く廃す。令 府に白し、假尉を以て之に代へ、其の半俸を分かつ。）とある。

(26)「梅芳已流管」は「梅花落」等の楽曲が演奏されたことを、「柳色未蔵鴉」は柳の葉が鴉を隠すほどには茂っていないことを言う。

(27)『孟子』公孫丑上に「所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子将入於井、皆有怵惕惻隠之心。」（人皆な人に忍びざるの心有りと謂ふ所以は、今 人の乍ち孺子の将に井に入らんとするを見れば、皆な怵惕惻隠の心有り。）、「惻隠之心、仁之端也。」（惻隠の心は、仁の端なり。）とある。

(28) 王伝飛「漢唐間文人相和歌辞的擬與変」（『楽府学』第四輯所収。呉相洲主篇、学苑出版社、二〇〇九）は、曹操「北上篇」が①行役②苦寒の状況③嘆き・憂鬱・悲哀や憂い・哀傷の情感、を基調とするのに対して、唐人による「苦寒行」は、斉梁に起こった賦題の手法を用いて、②の要素のみを突出させ、独特の「苦寒美」を詠出することを指摘される。また、松原朗「盛唐から中唐へ―楽府文学の変容を手掛かりとして―」（『中国詩文論叢』第十八集、一九九九）は、中唐にかけて伝統楽府の様式が崩壊し、一人称的な個我の世界を表現する「歌行」との境界が曖昧になったこと、「伝統楽府の歌行化」が孟郊と李賀に顕著なことを指摘される。

(29) この二句について、「雷」は春をもたらす恩恵の喩えと考え、志を曲げてつまらぬ人間になってでも、恥を忍んで努力すれば立身出世が得られることを言うものと解した。「擢第後東帰書懐献座主呂侍御」（巻六）では、及第の喜びを「夭矯大空鱗、曾為小泉蟄。幽意独沈時、震雷忽相及」（夭矯たる大空の鱗、曾て小泉の蟄なり。幽意 独沈の時、震雷 忽ち相ひ及ぶ）と詠い、呂座主の引き立てによって登第したさまを、地中に潜んでいた龍に雷が轟いたさまに喩える。ただし、「暍」が熱に当たる意であり、雪が冬の害であるのに対し雷は夏の害であることから、自己を痛めつける攻撃とする解釈（『孟郊詩集箋注』、郝世峰箋注、河北教育出版社、二〇〇二）も否定し難い。「雷」を恩恵とする場合、「暍」の解釈が問題となるが、温かさを表す程度の意味か、公正ではないことに対する皮肉を込めたものか、あるいは「暍」字の誤りで音の大きさを表す可能性も指摘できる。待考。

(30) 曹操「苦寒行」（『文選』巻二七）に「北上太行山、艱哉何巍巍」（北のかた太行山に上るに、艱なる哉 何ぞ巍巍たる）とある。

(31)「立徳新居十首」其六（巻五）にも「恥従新学遊、願将古農斉」（新学に従ひて遊ぶを恥づ、願はくは古農と斉しからんことを）とあり、新興の学問を恥じる内容が見える。また、孟郊の復古志向については、斎藤茂著『孟郊研究』、第三章第四節「古」への志向―「元魯山を弔う十首」（前掲注6）、山之内正彦「孟郊詩論（上）―連作詩を中心に―」（前掲注21）、薄井信治「孟郊の文学観について」（『宇部工業高等専門学校研究報告』第三四号、一九八八）に詳しい。

(32) 及第を果たした後、不本意な溧陽県尉に赴任する孟郊を見送った、韓愈の「送孟東野序」では、優れた文学は不遇な者の不平から生まれるとする文学理論を展開して、孟郊をその系譜に位置付け、魏晋の詩を凌ぐほどの、古に及ばんとするすばらしさを称えている。

(33) 坂野氏も、「この孟、韓両詩に用いられた「苦吟」とは詩作の苦しみを表すのではなく、愁いの情を駆るような詩（悲苦の吟、悲苦の情から吟う）を意味していると考えるのが適切なのである。」と述べられる（前掲注4）。

(34) 斎藤茂氏は、孟郊が詩中で「古」を強調しつつも、具体的意義の言及がなされておらず、彼の「古」の理念のあり方自体が観念的であったと述べられる（前掲注31）。また、山之内正彦氏は「自己の詩の社会的効用についての断念が、むしろこの種の正統意識を強く呼び出していると見られるのである。」（前掲注21）、薄井信治氏は「孟郊は復古主義の潮流でとらえられるべき詩人である。『孟東野詩集』にも「古」の字が頻出する。しかし、その多くは「今」を批判するために打ち出された「古」であって、具体的内容が伝わってこない。」（前掲注31）と述べられる。

(35)「老恨」（巻三）にも、自分の詩作が真の理解者を得られず、後世に伝えるべき子孫にも恵まれない憂いが、「無子抄文字、老吟多飄零。有時吐向牀、枕席不解聴」（子の文字を抄す無し、老吟 多く飄零たり。有る時 牀に向かひて吐くも、枕席 聴くを解せず）と読まれており、詩を「飄零」と形容している。

(36)『論語』陽貨篇に「悪鄭声之乱雅楽也。」（鄭声の雅楽を乱すを悪むなり）、霊公篇に「楽則韶舞、放鄭声遠佞人。鄭声淫、佞人殆。」（楽は則ち韶舞、鄭声を放ち佞人を遠ざく。鄭声は淫なり、佞人は殆し。）とあって、古の理想の音楽が「楽」、鄭の淫らな音楽が「声」の語で表現されている。

(37) 李白「古風」其一（巻一六一）。孟郊「答姚怨見寄」（巻七）にも、「大雅難具陳、正声易漂淪」（大雅 具さに陳べ難く、正声 漂淪し易し）とある。

(38) また、「雪」には清廉潔白なイメージがあり、とりわけ詩文や風骨など人間の内部におけるものの性質を表すとき、高潔さを称える働きを担う。自分の詩を「零落雪文字」と描いた表現（「自惜」）には自負が見える。

(39) 例えば「松篁遭挫抑、糞壤獲饒培」（松篁は挫抑に遭ひ、糞壤は饒培を獲たり）や「龍魚冷蟄苦、虎豹餓號哀」（龍魚冷たくして蟄るること苦しく、虎豹 餓ゑて号ぶこと哀し）など。

(40)『人文論究』第五十一号（北海道教育大学函館人文学会、

一九九一）。

（41）『詩経』邶風・匏有苦葉に「有瀰済盈、有鷕雉鳴。済盈不濡軌、雉鳴求其牡」（瀰たる済の盈てる有り、鷕として雉の鳴く有り。済り盈てば軌を濡らさざらんや、雉鳴いて其の牡を求む）、毛伝に「鷕、雌雉声也。」（鷕は雌雉の声なり）とある。

（42）孟郊「秋懐十五首」其十三（巻四）にも、「霜気入病骨、老人身生氷。衰毛暗相刺、冷痛不可勝。鷕鷕伸至明、強強攪所憑」（霜気 病骨に入り、老人 身に氷を生ず。衰毛 暗に相ひ刺し、冷痛 勝ふべからず。鷕鷕と伸べて明に至り、強強として憑る処を攪る）とあって、寒さと痛みに喘ぐようすが「鷕鷕」の語で表されている。

（43）斎藤氏は、詩人不遇と飢餓との結びつきが、孟郊の晩年の詩に顕著であることを指摘される（前掲注31）。また、山之内正彦氏は「精神的な痛みを身体に転移させるというのが、孟郊の独自な詩的方法なのであって、この方法が困窮を対象とするなら、生活と身体とがもっとも鋭く交叉する一点である飢餓が引き出されてくるのは当然であろう。」と述べられる（前掲注21）。

（44）早い時期に孟郊と交流のあった皎然の『詩式』には、「偸語」「偸意」「偸勢」という三段階の剽窃が説かれている。

（45）『孟郊詩集校注』（前掲注6）は、この詩を「唐代以詩賦取士、故士子中互相剽窃詩文者在在有之。疑本詩即為批評這種現象而作」と解題し、挙士による剽窃を批判したものとする。

（46）心を尽くして文章の真理を探り出そうとすることが「攪営魂以探賾、頓精爽於自求。」（営魂を攪りて以て賾を探り、精爽を頓して自ら求む。）と記されている。